

おとさだ 乙 貞

第260号 通巻45第3号
令和7（2025）年8月1日発行

守山市立埋蔵文化財センター
〒524-0212 守山市服部町2250番地

TEL&Fax 077（585）4397
Mail maizobunkazai@city.moriyama.lg.jp

今の時季は、二十四節気という大暑で、夏の暑さもクライマックスを迎えています。一年を二十四の時候で編んだ節気を更に機微の移ろいで細分した七十二候では、明日八月二日から立秋前の六日までを「大雨時行」と呼んでいます。大暑の末候であり、ひと夏最後の候になります。

さて、大雨時行は「たいうときどきふる」と読まれ、夏空に突如入道雲が沸き上がり、突然の雷鳴とともに激しい雨が灼熱化したアスファルトを叩き、乾いた大地を潤す情景を表現しています。新旧の暦の違いはあれ、局部的豪雨や夕立に見舞われるこの時季を言い得て妙です。

大暑が明けると、暦の上では立秋となりますが、暑さは衰えることを知りません。筆者が屈託なく夏休みを享受した昭和の時代とは異質で、観測史上最高気温が度々、更新されています。そのような危険ともいえる炎天下の下でも、発掘調査は粛々と行われ、大きな成果をもたらしています。発掘調査に従事される皆さんはもとより、炎天下で作業される皆様、おいとください。

それでは、6月以降の発掘調査と各種イベントについて、報告いたします。

発掘調査だより

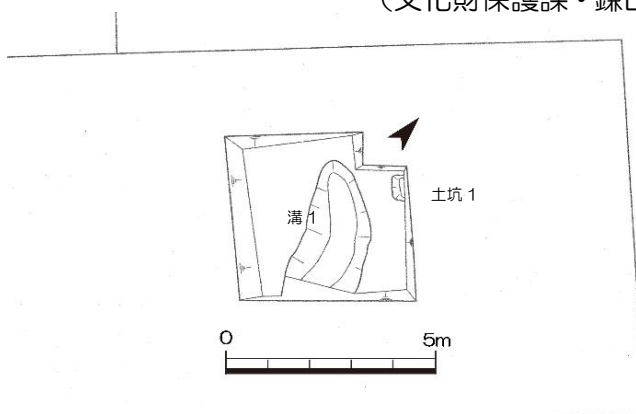
吉身西遺跡第138次調査

守山五丁目字中岩賀で計画される個人住宅建築に先立ち、6月5日～6月6日の2日間で発掘調査を実施しました。約15㎡の範囲を掘削したところ、遺構検出面を掘り込む形で、溝1条と土坑1基を検出しました。溝の形状は、内側が直線的に延びる反面、外側が丸く屈曲した半月状を呈しています。溝の埋土からは、上層から中層で多量の土器が確認でき、特筆すべきものとしては、上層で弥生時代の受口状口縁甕の破片が、中層下位でも弥生土器の甕と高坏が出土しています。狭隘な調査地であるため、溝の全容は把握できませんでしたが、今後の調査の進展に伴って全容が明らかにされることでしょう。

（文化財保護課・鎌田）



吉身西遺跡遺構検出写真



吉身西遺跡第138次調査平面図（枠線は開発範囲）

三反田遺跡第1次調査

6月23日に、矢島町字早稲前で個人住宅建築に先立ち、三反田遺跡の発掘調査を実施しました。この遺跡は、令和5年8月に矢島町字三反田および字早稲前で宅地造成工事に先立って、実施した試掘調査によって新たに発見されました。主に字三反田に遺構が広がっていたことが

ら、三反田遺跡と名付けられましたが、今回の調査が端緒になります。

調査は、住宅建築箇所の約25㎡を対象に実施したところ、右図の遺構検出写真にあるように、弧状に屈曲する幅3m前後、深さ30cmを測る溝1条を検出しました。この溝からは、平安時代以降の土師器皿が1点出土しているものの、溝の時期決定資料にはならず、溝の時期や性格はわかりません。

今後の調査で三反田遺跡の実態や、今回の検出遺構の性格が明らかになることを期待しています。（鎌田）

阿比留遺跡第7次調査

小島町字堂ノ後において、住宅建築に伴う発掘調査を7月10日に実施し、約22㎡の調査地からは、竪穴建物1棟（SH-1）と溝3条（SD-1～3）、土坑4基（SK-1～4）、柱穴10穴（P1～10）を検出しました。

まず、SH-1は方形の竪穴建物で、調査地で南東半を検出し、過半は調査区外となりますが、一辺5m前後の規模が考えられます。この建物は床面に厚み約5cmの貼床が認められました。また、床面には壁溝が巡り、東辺中位に貯蔵穴を設けています。床面の配置や壁溝出土の土師器甕小片から古墳時代の遺構と考えられます。

4基の土坑のうち、SK-4からは8世紀前半の須恵器甕が出土しています。

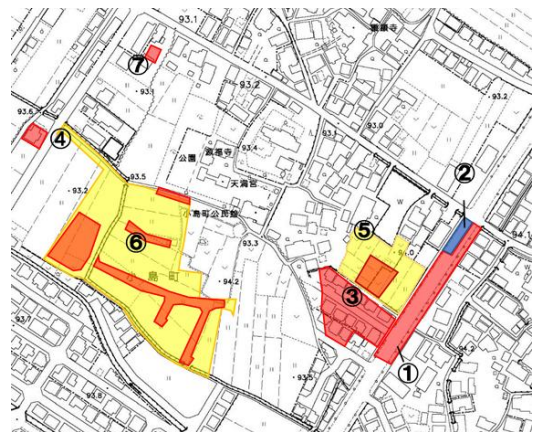
柱穴では、P2、P4、P6、P8からは土師器が、P9からは柱材が出土しています。

3条の溝では、SD-3からは土師器皿が出土していて、鎌倉時代の時期が考えられ、SD1、2も同一方向

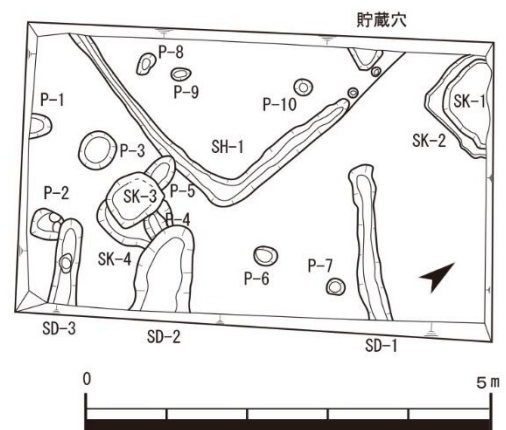
掲載した発掘調査位置図



三反田遺跡第1次調査遺構検出写真



阿比留遺跡既往調査位置図



阿比留遺跡第7次調査平面図

を向くことから同時期と考えられます。

阿比留遺跡では、今までの調査で弥生時代後期の竪穴建物や方形周溝墓、石見型木製品が出土した5世紀代の前方後円墳などがみついています。

今回の調査地は、遺跡の北西端に位置し、古墳時代以外に奈良、鎌倉時代の遺構が検出されたことから、阿比留遺跡の新たな知見が得られたものと考えます。

（埋蔵文化財センター・沖田）

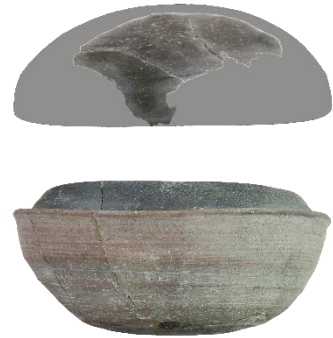
目田川改修工事関連 吉身西遺跡発掘調査 ～整理調査だより

前号から掲載しています「目田川改修工事関連 吉身西遺跡発掘調査の整理調査だより」、今号でもお伝えします。

今回は第6次調査で出土した大型蓋坏を紹介します。古墳時代には、須恵器と呼ばれる新たな土器が使われるようになります。その中でも、坏とその蓋は5世紀末から守山でもポピュラーな食器として使われています。時期によって多少は前後しますが、通常は口径12cmほどの大きさであるのに対し、今回出土した蓋坏は口径20cmを超える大型品です。

これまでも大型蓋坏は、市内では吉身南・北遺跡をはじめとする古墳時代後期の集落跡から出土しています。管見ながら、6世紀初～中葉の時期に、野洲川流域とその周辺で出土することが多いようです。

この地域の首長のオーダーメイド品として、例えば、操業を始めた野洲市夕日ヶ丘北遺跡や竜王町鏡古窯址群などの近場で生産された須恵器かもしれません。



吉身西遺跡第6次調査出土の大型蓋坏実測図

令和7年度歴史入門講座 開講しました！

令和7年度歴史入門講座第1講を6月21日（土）、第2講を7月19日（土）に開催しました。

第1講は、「横江遺跡 令和の大発掘」をテーマに、調査を担当された小林裕季さん（〔公財〕滋賀県文化財保護協会）に講演していただきました。

横江遺跡は、昭和の大規模調査で中世村落がまると現れ、それまで散在していた家々が集村化するプロ



第1講開催風景



第2講開催風景

セスや中世の人々の暮らしぶりを知ることができました。今回の令和の大発掘では、中世村落以外にも明らかになった縄文時代から古墳時代の横江遺跡をわかりやすくお話していただきました。

続く第2講のテーマは「藤原仲麻呂と近江」、大津市文化財保護課の田中久雄さんに講演していただきました。

今回のテーマに上がっている藤原仲麻呂は、権勢をほしいままにした奈良時代の政治家です。藤原鎌足を曾祖父に、不比等を祖父に持ち、太政大臣に上り詰めてもなお、近江守を辞さなかったとされています。

田中さんは、大津市神領の国庁跡をはじめとする古代遺跡の発掘調査成果を通して、仲麻呂の人となりや滋賀県との関係性に言及されました。

小林さん、田中さん、大変興味深いご講演、ありがとうございました。

埋蔵文化財センター友の会 第2回見学会を開催しました！

7月11日（金）、第2回見学会を開催しました。今回の見学先は甲賀市で、その歴史と文化を学ぶことができました。

今回、最初に訪れたのは、映画やドラマのロケ地としても知られている油日神社で、宮司さんに神社の云われと、境内地の甲賀歴史民俗資料館の展示品について説明していただきました。

次の訪問先・くすり学習館では、長嶺館長からのくすりの由縁や忍者との関わりなどのお話を興味深く聞かせていただきました。



油日神社での記念撮影

午後に見学した甲賀流リアル忍者館には、甲賀市の顔のひとつ、甲賀忍者にまつわる資料が展示されていて、こちらも興味深く学ぶことができました。

そして、今回最後の日程として訪れた紫香楽宮跡関連遺跡調査事務所と5月にオープンしたばかりの史跡公園では、甲賀市の渡部さんに、紫香楽宮の歴史と史跡公園について説明していただきました。

今回の見学会でお世話になった皆さん、ありがとうございました。



当日の見学風景・昼食風景

これまでの乙貞や新着情報は、『歴史のまち守山』や Facebook からご覧いただけます！



◀ 歴史のまち守山はコチラから

<http://moriyama-bunkazai.org> どうやら節句の趣旨は形骸化し、

守山市立埋蔵文化財センターFacebook ページはコチラから▶

<https://www.facebook.com/MaibunMoriyama/?ref=bookmarks>



【後記】先月放映の大河ドラマでは、今日の世情をミラーリングするような天明3年の米騒動下の混乱する江戸市中や当時の施政者田沼意次の失墜が映像化されていて、身につまされる面持ちでご覧になった方も多かったのではないのでしょうか。この米騒動は、その後の江戸三大飢饉に挙げられる天明飢饉の凶兆といえます。

飢饉の始まりは、天明2年（1782）の寒冷化による米の不作で、翌3年の浅間山大噴火の降灰が追い打ちをかけ、さらには天明6年の全国規模の風水害と、天災の続発によって、多数の餓死者を出すに至ります。ドラマでは米価の高騰はもちろんの事、米不足が深刻化します。その当時も困米と呼ばれた備蓄米の制度があり、幕府は備蓄米を放出しますが、なかなか市場に流通しない。江戸町奉行が買占め抑止のため米問屋の米蔵を検分したり、米問屋以外でも米の売買ができるよう米穀売買勝手令を發布しますが、それでも米不足は解消されず、各地で打ちこわしが頻発しました。

江戸時代の大人一人の米の消費は一日3～5合であること、年貢米が財源である幕府にとって、米価が高値になることは一長一短あることは現在にはない社会要因ですが、それ以外は、令和の米騒動と同じ、それぞれの思惑と市場原理が働いた結果といえます。

温故知新、もっと歴史を学ばないと悪しき歴史は繰り返されます。

（馬耳東風）